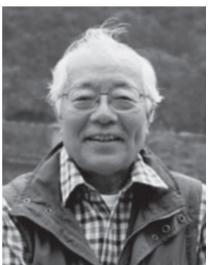


防災と文化——強靱な国土づくりへ——

公益財団法人
リバーフロント研究所
代表理事

竹村公太郎

Kotaro Takemura



防災と地域文化

3・11震災復興の会議で、ある町長の隣になった。ふつとその町長が「堤防が出来たらお祭りはどうなるんでしょね」と独り言のように言った。津波を防ぐ巨大堤防が建設されると、昔からの祭りが衰退してしまうと心配していたのだ。地域の安全と伝統文化をどうやって守っていくのか。安全と文化は背反して共存出来ないのか。地域のリーダーにとって地域の伝統文化はかけがえないものだ。各地の被災地の人々は、昔からの文化をどうやって復活させるかという課題に向き合っている。

かつて文明があった。ユーラシア大陸の極東の海に浮かぶ日本である。大陸と日本列島の間には三〇〇キロメートルの海峡があり、流れの速い海流が、日本を大陸の暴力から守った。日本を侵略する敵はいなかった。しかし、敵がいらない日本各地にも、多くの共同体が存在し、多様な文化が存在していた。では、それら共同体の敵は誰だったのか？

洪水という敵

日本列島は南北三、〇〇〇キロメートルと細長く、中央には脊梁山脈が走り、その山々から太平洋と日本海に無数の川が流れ下り、その河口部には狭い沖積平野が形成されている。日本人は、この沖積平野で稲作を開始した。この沖積平野は肥沃であったが、洪水に対して危険な土地であった。人々は洪水から自分たちを守るため集団を形成した。この集団の敵は、洪水だったのだ。人々は堤防を築造した。堤防は築造する以上に、維持管理が重要である。油断すれば、堤防はモグラの穴だらけになり、豪雨の後には法面が崩れていくからだ。

武田信玄は笛吹川で信玄堤を建設した。しかし、信玄の妻はそこで止まらない。信玄堤の横に三社神社を祀り、周辺の集落から神輿を集

文化とは何だろうか？ その答えは難しい。文化学者の岡潔先生は、「文化とは、ほのぼのとした懐かしいもの」と答えている。

ほのぼのとした懐かしさは、仲間という時に感じる。仲間ではない人という時には、ほのぼのとした懐かしさはない。歴史上、いつも人類は敵と味方に分かれてきた。仲間は味方でありそれ以外の集団は敵であった。

二十一世紀の日本で、敵と言ってもピンとこない。しかし、オリンピックやワールドカップを見れば分かる。普段は敵ではない国が敵になり、日本を強く意識してしまう。文化を共有する共同体にとって、敵の存在は不可欠のようだ。

める三社祭を起こした。ワッショイワッショイと信玄堤の上を神社に向かう祭りが始まった。ねらいは、人々が堤を踏み固めることであった。この祭りは二十一世紀の今でも続いている。この手法は、江戸幕府に引き継がれた。江戸時代初期、隅田川の洪水を防ぐため、浅草寺の北側で日本堤を築造した。そこで、幕府は巧妙な仕掛けをした。今の日本橋にあった吉原遊郭を、浅草の日本堤に移設した。

それまで寂しかった日本堤を、江戸中の男たちが新吉原に向かった。彼らはゾロゾロと歩いて、日本堤を踏み固めていった。その後、対岸に墨田堤が築造された。江戸幕府は、左岸の墨田堤の向島に料亭街を集めた。その墨田堤には桜を植え、花見のメッカにした。夏には両国橋で花火大会も行われた。さらに、江戸中の芝居小屋を浅草の猿若町に移転させた。それは明治になって浅草六区となった。

江戸中の人々が浅草に集まった。そして、堤防の上で楽しい思い出を積み重ねながら、堤防を踏み固めていった。

堤防と文化

堤防の踏み固め作戦は、全国で行われた。地域の守り神の神社は堤防の傍に祀られ、人々は堤防の上を神社に向かった。長良川の治

共同体と敵

世界史はユーラシア大陸を舞台に動いた。それは暴力による侵略の繰り返しであった。暴力は大陸を疾走し、侵略地の象徴を破壊し、文書と言語を圧殺し、女性たちを犯し、男性たちの目を潰し、過酷な労働に追いやった。

世界史で登場したあらゆる文明は、闘い、侵略し、侵略されていった。これらの文明は、敵と闘いながら、敵と自分たちを差別化する独自の文化を形成していった。共同体とその文化は、敵の存在によって鮮やかさを増していった。しかし、世界史の中で、戦わず、侵略されな

水神社、多摩川左岸の穴守神社、酒匂川の福沢神社など、河川堤防の傍に神社が祀られた。

神社だけではない。堤防で様々なお祭りが工夫された。新潟の大風揚げや九州の筑後川の祭りは堤防を歩く祭りである。山形県の花笠踊りは「でかした堤、水も漏らさぬ深い仲、ヨカマカシヨ」と踊って堤を踏み固める祭りである。

正月の初詣、春の花見、夏の花火、秋の祭りで、人々はぞろぞろと堤防を歩いていった。人々は堤防を踏み固めながら、自分たち共同体の思い出を積み重ねていった。

二十一世紀の今、神社や、祭りや、花見や、民謡や、田舎芝居や、花火を見ると、なにか懐かしい思いに包まれる。この懐かしさが岡潔先生の言った文化なのだ。

今、強靱な国土づくりが言われている。強靱な国土とは、単に頑丈なインフラ構造物で国土を覆い尽くすことではない。地域の安全を守る防災インフラは、その地域の文化を生み出していくステージでなければならない。

強靱な国土づくりが成功するか否かは、防災インフラに人々が集まり、人々がそこで楽しみ、そこで思い出をつくる「強くてしなやかな構造物」でなければならない。

インフラの専門家は、難しい課題を与えられたこととなった。